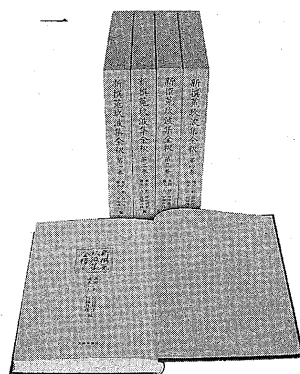


奥田 勲・岸田依子・廣木一人・宮脇真彦、編

『新撰菟玖波集全釈』全八巻・別巻

両角倉一



1999年5月～
三弥井書店
A5判上製
定価 各巻8500円（本体）

よく知られているように、連歌文芸は、甲斐の国の酒折宮におけるヤマトタケルノミコト（『古事記』は倭建命、『日本書紀』は日本武尊）の片歌唱和に淵源すると言う説があり、その呼びかけの片歌に「にひばり つくは（菟玖波・筑波）をすぎていくよかねつる」とあることにより、古来「筑波（菟玖波）の道」と呼ばれている（中世の連歌作者たちは『古事記』ではなく『日本書紀』によっていた）。

その名称を反映した准勅撰連歌集として、南北朝時代に『菟玖波集』、室町中期に『新撰菟玖波集』が成立して、連歌史を代表する二大撰集となっているが、『菟玖波集』には福井久藏著『校本菟玖波集新釋（上巻・下巻）』（早稲田大学出版部、上巻は昭和十一年刊、下巻は昭和十七年刊）及び福井久藏校註『日本古典全書 菟玖波集（上・下）』（朝日新聞社、上巻は昭和二十三年刊、下巻は昭和二十六年刊）があるものの、『新撰菟玖波集』の方は

全文の注釈が無く、連歌字の遅れを象徴していた。その長年の渇を一気にいやすかのように別巻を含む九巻の大冊として近頃登場したのがここに紹介する『新撰菟玖波集全釈』である。その各巻の概要は次のとおり（括弧の中の「巻第一 春連歌上」などは『新撰菟玖波集』の部立てを示す）。

- 全釈第一巻（序／巻第一 春連歌上／巻第二 春連歌下／巻第三 夏連歌） 平成十一年五月刊
- 全釈第二巻（巻第四 秋連歌上／巻第五 秋連歌下） 平成十二年三月刊
- 全釈第三巻（巻第六、冬連歌／巻第七 賀連歌・哀傷連歌／巻第八 恋連歌上） 平成十三年三月刊
- 全釈第四巻（巻第九 恋連歌中／巻第十 恋連歌下） 平成十四年九月刊
- 全釈第五巻（巻第十一 羈旅連歌上／巻第十二 羈旅連歌下／巻第十三 雑連歌一） 平成十五年十一月刊

○全釈第六巻（巻第十四 雑連歌二／巻第十五 雑連歌三） 平成十六年刊行予定

○全釈第七巻（巻第十六 雑連歌四／第十七 雑連歌五・聯句連歌／巻第十八 神祇連歌・釈教連歌） 未刊

○全釈第八巻（巻第十九 発句上／巻第二十 発句下） 未刊

○全釈別巻（作者略歴／引用和歌連歌索引／歌語・注釈語索引／論考編（総論、配列・作風、撰集資料）） 未刊

出版が年に一冊というゆっくりとした進行であるけれども、それだけに各句の注釈は「語釈」「付合」「現代語訳」「備考」の四項目にわたり精細であり、特に「付合」の項目に重点をおいて詳しく叙述しているのは、歌集とは違う連歌句集の注釈として適切である。そして、各句の微視的な探究と共に、この撰集の各巻の冒頭に巻ことしの「構成」「配列」「歌材目次」などの巨視的な整理の欄を設けているのは、読者の構造的な理解を助ける良い工夫と言えよう。

この撰集の序文の注釈は奥田勲氏が担当して批評的な新見を提示しており、右に言及した巻ことしの「構成・配列・歌材目次」の欄は編者の奥田・岸田・廣木・宮脇の四氏が交互に執筆して要所を

押さえている。そして、各句の注釈は「連歌の会」の会員が分担し、月一回の研究会での報告討論の後に執筆したものを編者が整理して『全釈』各巻にまとめたものと言う。

「連歌の会」の会員は『全釈』第一巻以降若干の人の出入りがあるが、第五巻の段階では、十八人という大所帯となっている。主宰の奥田氏と編者に名を連ねる岸田・廣木・宮脇の三氏を中心にして伊藤伸江・大村敦子・綿拔豊昭、等の練達の諸氏で脇を固めているのは心強く、特に注目されるのは『全釈』第一巻の段階以来、大学院生など若い人々が多く加わっている点である。この会を領導する方々がこの連歌句集の注釈の共同研究を通して多数の新進の連歌研究者を育成して行くこととする方針は意義深く、敬意を表わしたい。

さて、『新撰菟玖波集』の注釈研究史の叙述としては解説が前後するが、この連歌句集の部分的な注釈としては、以前に伊地知鐵男校注『連歌集』（岩波書店、日本古典文学大系、昭和三十五年刊）所収「新撰菟玖波集抄」にいわゆる連歌七賢（宗硯・智蘊・行助・能阿・心敬・専順・宗伊）と撰者作者等（宗祇・兼載・肖柏・宗長）の句を対象にしたものがあったて多くの成果をあげたことがあったが、その重なる句の部分に限っても、『全釈』はさらに多くの新しい読みを追加している。その例は枚挙

にいとまがないが、その一例として「蘇武や『源氏物語』の浮舟の物語を想起させる……」と解説する巻第十二・二三三六―二三三七「なしと聞きしぞ永らへにける／国遠き伝はまことの稀なれや法橋兼載」（『全釈』第五巻、一三五ページ）の付句のすぐれた注釈をあげておこう。

そして、伊地知氏の『連歌集』に未収の『新撰菟玖波集』の句の注釈は、すべて初めてのものである。その開拓者としての労を多としつつ、この注釈に先導されながら、今後、読者それぞれが読みを深めて行くことが期待される。「作品の解説はつねに終わらなき営み」（『全釈』第二巻「あとがき」、岸田依子氏）であるからである。

この紹介文は既刊の『全釈』第一―第五巻を手元に置いて書いているが、この小文が活字になるまでには第六巻も刊行されて魅力的な解説が公開されるであろう。又、聯句連歌（和漢聯句・漢和聯句）等を含む『全釈』第七巻や発句を対象にした第八巻など興味深い巻も順調に公開されて、この大著が早めに完結することを願っている。

なお、『全釈』第一巻を最初に読んだ時の率直な感想の一つとしては、作者についての情報を別巻にゆずって無注記の箇所が多いのがやや不満であった。作者部類を併載する横山重・野口英一、校訂『新撰菟玖波集 明応本』（風間書房、昭和三十三年刊）や横山重・金子金治郎、編『新撰菟玖波集 実隆本』（角川書店、昭和四十五年刊）などを座右に備えていない読者のために「前左大臣」「前関白近衛」「入道前右大臣」「関白右大臣」「内大臣」などの官名のみの作者については、それぞれの初出の箇所では姓名などを注記する配慮があってもよかつたのではなからうか。その点を補うためにも「作者略歴」「作者索引」などを含む別巻の早い刊行が待たれる。

又、各句の元になった百韻・千句や抜句集・公家日記等の他出文献についての情報で追加してよい資料が散見するので、別巻の「撰集資料」「他出文献一覧」などの欄で補ってくださるよう要望しておく。例、続群書類従本等「將軍家百韻」、静嘉堂文庫本等「実隆独吟何木百韻」、諸本「河越千句」、後鑑付載本・松平文庫本等「御連歌集・愚句（義政句集）」、大日本史料第八編之三十二翻刻陽明文庫本等「宗祇山口下向抜句」、言国卿記及び実隆公記紙背に記載の前句付資料、宮内庁書陵部本「賦物連歌」、その他。

（もろすみ そういち 山梨県立女子短期大学
名誉教授）